

【補註6】*Āṅguttarāpa* (アングットラーパ国)

[0] アングットラーパ (*Āṅguttarāpa*) にはアーパナ (*Āpaṇa*) という市場町 (*nigama*) があって、そこに住むケーニヤという螺髻梵志 (*Kenīya jaṭṭila*) が釈尊と 1,250 人も比丘たちを食事に招待して、その準備に忙しく立ち働いていたためにセーラ (*Sela*) 婆羅門が、「嫁取り (*āvāha*) があるのか、嫁入り (*vivāha*) があるのか、大きな祭祀 (*mahāyañña*) を行うのか、ピンピサーラ王を軍隊と一緒に招待しているのか」と尋ねたというエピソードで有名なところである⁽¹⁾。食後 (非時) に飲料を飲むことが許されたのもこの時のことである。

このアングットラーパは以下に述べるように普通の国であったようであるが、十六大国でいえば、その所属する国はどこで、どの辺りに位置したのかということ調査する。

- (1) *Suttanipāta* 003-007 (p.102)、*Apadāna* 003-040-389 (p.316)、『増一阿含』049-006 (大正02 p.798上)、*Vinaya* 「業毘度」(vol. I p.245)、『四分律』「業毘度」(大正22 p.873上)、『五分律』「食法」(大正22 p.151中)、『十誦律』「医薬法」(大正23 p.190下)、『十誦律』「比丘誦」(大正23 p.413中)、『十誦律』「因縁品」(大正23 p.462上)、『僧祇律』「雑誦跋渠」(大正22 p.463中)、『僧祇律』「雑誦跋渠」(大正22 p.464上)

[1] アングットラーパの漢訳名としては以下のものが知られる。

阿牟多羅国：『四分律』「業毘度」(大正22 p.873上)

鸯求多羅国：『僧祇律』「雑誦跋渠法」(大正22 p.463中)、『僧祇律』「雑誦跋渠法」(大正22 p.464上)、『僧祇律』「雑誦跋渠法」(大正22 p.477上)

なお『雑阿含』1077 (大正02 p.280下) に「央瞿多羅国」という地名が見いだされる。この経は *MN.086 Āṅgulimāla-s.* (鶡掘摩経 vol. II p.097) および『別訳雑阿含』016 (大正02 p.378中) と対応し、前者は舞台を *Sāvattihī* の *Jetavana* の *Anāthapiṇḍikārāma* とし、後者は摩竭国桃河樹林とする。これはアングリマーラの活動地であって、したがって「央瞿多羅」はアングリマーラから来た語であると考えられる。『四分律』『僧祇律』などの地名と相似するが、よってこれは異なる地名と判断する。『翻梵語』巻6 (大正54 p.1026下) の「央瞿多羅國人譯曰體勝」とするもの、この後に「仏見牧牛者示通経」とし、『雑阿含』1077の内容を挙げるからこちらの方である。

[2] パーリ聖典の中には *Āṅguttarāpa* は *Suttanipāta* 003-007 (p.102) と *MN.054 Potaliya-s.* (vol. I p.359) に出るが、ただ地名のみを記して国とも都市とも村ともしない。しかし漢訳資料ではすべて「国」とする。しかしながら十六大国にこれが上げられることはないから、この「国」は「その中に複数の市場町や田園部=村を擁する普通の国」を表すと考えられる。アーパナという *nigama* (市場町) はその一部である。

[3] それではアングットラーパという国はどのあたりに存し、十六大国でいえば何国に属していたのであろうか。

[3-1] B文献資料であるが、*MN.054 Potaliya-s.*に対するアツカター *Papañ-casūdani* (vol. III p.034) には、「アングットラーパにおいて (*Āṅguttarāpesu*) というアングとは国 (*Āṅgā yeva so janapado*)⁽¹⁾ である。またマヒ河の北に水郷があり (*Mahiyā pana nadiyā uttarena āpo*)、そこに遠くないので (*Uttarāpa*、北の水郷) と呼ばれる。どのマヒ河の北の水郷であるかといえば、それはマハーマヒ (*Mahāmahī*) である」とする。そしてマハーマヒについて、ヒマラヤから発する五大河 (*pañca mahānadi*)、すなわちガンガー (*Gaṅgā*)・ヤムナー (*Yamunā*)・アチラヴァティー (*Aciravati*)・サラブー (*Sarabhū*)・マヒ (*Mahī*) のうちの第5がこれにあたりとし、「この河の北の水郷に遠くない国 (*janapada*) がアングットラーパであると理解されるべきである」と締めくくっている。

おそらくこの河は、ヒマラヤに水源を有し、西北から流れてきて、現在のガンジス河の南岸の町 *Bhagalpur* とその西 35km くらいにある *Munger* の間くらいでガンジス河に合流する、現在の河の名でいえば *Majhaul* 河にあたるであろう。古代のアング国首都であった *Campā* はわれわれの調査によれば、この *Bhagalpur* の西約 8 キロのところにあるガンジス河南岸の現在の *Campānagara* という村に比定される。この村の近くには現在 *Campā* と呼ばれる川が南の方からガンジス河に流れこんでおり、パトナ博物館の *Dr. O. P. Pandey* 氏によると、1970年にここをパトナ大学が発掘調査して、10個くらいの古代の建物跡が発見されたということである。その報告書は出されているのであるが、残念ながら出版されていない。したがってマヒ河はおそらくこの *Campā* という都市の向かいあたりでガンジス河と合流していたものと考えられる⁽²⁾。

そしてアングットラーパはこのマヒ河のさらに北にあったのではなかろうか。要するにガンジス河を挟んでチャンパーの北にあったということになるが、ここもまた「国」と呼ばれ、「*janapada*」と呼ばれているから、独自の文化を持った国であったわけであるが、しかし政治的にはアングという十六大国に数えられる国に属していたのであろう。また後に書くようにこのアングさえも、釈尊時代にはマガダ国の属国であったから、大きいえばマガダの支配下にあったということになる。

(1) *janapada* の示す概念は「モノグラフ」第13号に掲載した【論文15】「パーリ仏典に見る *janapada* と *raṭṭha*」を参照されたい。

(2) *A Historical Atlas of South Asia*, The University of Chicago Press, 1978のp.019のB地図では、マヒ河は今の *Gandak* 河よりも東にあって、北からガンジス河に *Campā* よりも西あたりで合流するように描かれている。

[3-2] ところで *Suttanipāta* (p.102) には、「ある時世尊はアングットラーパを 1,250 人の比丘からなる大比丘サンガとともに遊行して、アーパナというアングットラーパの町に住された (*Āpaṇaṃ nāma Āṅguttarāpānaṃ*)

nigamo)」とし、『四分律』(大正22 p.873上)は「爾時世尊從阿牟多羅國人間遊行、至阿摩那城在翅鬘編髮婆羅門園中」とし、『僧祇律』(大正22 p.463、p.464上、p.477上)はケーニヤが住んでいたところを「佛耆求多羅國遊行。時雞尼耶螺髻梵志聞世尊來」として、アーパナはアングッタラーバの町であったとするのであるが、このアーパナをアング(Aṅga)国に属する町(nigama)とみていた経がある。

SN.048-050 (vol. V p.225) : あるとき、釈尊はアング国^①のアーパナという名のアング国人の町に住された(ekam samayaṃ Bhagavā Aṅgesu viharati Āpaṇaṃ nāma Aṅgānaṃ nigamo) (1)。

『中阿含』192「加樓烏陀夷經」(大正01 p.740下) : 我聞如是。一時佛遊耆伽國中。與大比丘衆俱。往至阿瑟那住撻若精舍。

『中阿含』081「念身經」(大正01 p.554下) : 一時佛遊耆祇國中。與大比丘衆俱往詣阿和那撻尼住處。

というものである。上述したようにアングッタラーバはアング国に属する属国であるとすれば、アーパナが「アング国のアーパナという町」とされているとしても不思議ではないわけである。

なおスッタニパータ、およびマジマ・ニカーヤの註釈によると、この町(niga-ma)には2万の商店(āpaṇa)が軒を連ね、その特徴づけられる光景によりアーパナ(店、市場)という名がつけられたという^②。

(1) PTSテキストではĀpaṇaとする。

(2) *Papañcasūdanī* (vol. III p.037) には「《アーパナ(Āpaṇa)という名》とは、この町(nigama)には2万の店(āpaṇa)の戸口が区分されていたという(Āpaṇaṃ nāmā ti tasmim kira nigame vīsati āpaṇamukhasahassāni vibhattāni ahesuṃ.)」とある。また *Paramattha-Jothikā* (II vol. II p.440) にも「商店(āpaṇa)が沢山あるので、その町(nigama)は《アーパナ(Āpaṇa)》とだけいうの名を得た。そこには、聞くところでは、2万の店舗が戸口を〔並べて〕区分されていた(āpaṇabahulatāya so nigamo Āpaṇo tv eva nāmaṃ labhi, tasmim kira vīsati āpaṇamukhasahassāni vibhattāni ahesuṃ.)。『仏のこことば註(3)』(p.254)

[3-3] またアングッタラーバと他の都市ないし国との地理的な関係を示すものも存する。

律藏の「薬健度」であるが、*Vinaya* (vol. I p.240以下)には次のように記されている。

バディヤ市(Bhaddiyanagara)にメンダカ(Meṇḍaka)という居士がいて、居士も妻も息子も穀物や食物や金銀が自然にわき出してくるといふ神通力を持っていた。マガダ国のピンビサーラ王は自分の領土に(amhākaṃ vi-jite) そのような神通力を有する者がいるという噂を聞いて、大臣に見て確かめてこいと命じ、大臣は確かめてその通りだと報告した。

ときに世尊はヴェーサーリーに随意の間住されて、バディヤに向けて遊行された。居士メンダカは世尊を訪ねて行って法を聞き、優婆塞となった。世尊はバディヤに随意の間住されてから、アングッタラーバに向かって遊行された。それを知ったメンダカは比丘らに行路の際の糧食(pātheyya)を許されたいと願い出て許された。

そしてアーパナに到着された世尊はケーニヤ螺髻梵志の供養を受けられ、食後の飲料を許された。さらに世尊はアーパナに随意の間住された後に、クシナーラーに向けて遊行された。

釈尊の遊行経路だけを抜き出すと次のようになる。

ヴェーサーリー⇒バディヤ⇒アングッタラーバ=アーパナ⇒クシナーラー

他の漢訳律も内容はほぼ同じであるが、釈尊の遊行経路には若干の相違がある。

『四分律』「薬健度」(大正22 p.872中以下) : 毘舍離⇒蘇彌⇒跋提城⇒阿牟多羅國(Aṅguttarāpa)⇒阿摩那城(Āpaṇa)

『十誦律』「医薬法」(大正23 p.191上) : 毘耶離⇒修摩国^①⇒波提城・勝葉林⇒頻闍山⇒漫陀耆尼池の岸上(*結髮仙人・鷄尼耶)⇒阿摩那国(Āpaṇa)⇒阿頭佉国(Ātumā)⇒波婆国(Pāvā)

このようにこれらは、ヴェーサーリーからバディヤに至る間に蘇彌あるいは修摩(蘇摩)をはさむのである。この蘇彌、修摩(蘇摩)については【補註11】で検討する。

これにたいして『五分律』「食法」(大正22 p.150中)は

王舎城^②⇒跋提城・罔林樹下⇒(漸漸に北行して)罽那編髮外道住処⇒阿牟聚落(Ātumā)⇒波旬邑(Pāvā)とし、これは出発点をヴェーサーリーではなく王舎城とし、そこからバディヤに至られたとする。

ヴェーサーリーはガンジス河の北辺に位置し、アングッタラーバもガンジス河の北側に位置するから、バディヤもガンジス河の北辺に位置するとすれば、*Vinaya*や『四分律』『十誦律』の記述はきわめて妥当な遊行経由ということになるのであるが、『五分律』ではこのように理解しにくいわけである。

ところでこのバディヤは *Dhammapada-A.* (vol. I p.384) によれば、アング国のバディヤ市(Aṅgaratṭha Bhaddiyanagara)とする。そうすると先の『五分律』に分がありそうであるが、ガンジス河の北側にあったアングッタラーバもアング国に属していたとされるのであるから、このバディヤも同様に考えて差し支えないであろう。とするならばやはり *Vinaya*や『四分律』『十誦律』のように、世尊はヴェーサーリーから出発されたのであって、したがってバディヤもガンジス河の北側にあり、ヴェーサーリーとアングッタラーバの間において、アング国に属していたと考えるのが妥当であろう。

以上のように考えると、ガンジス河の北側には、ヴェーサーリーから蘇彌あるいは修摩を経由してバディヤに行き、そこからアングッタラーバに行き、その近くでガンジス河を渡ってチャンパーに達する道があったということになる。

この道は次の2つのルートが考えられる。現在の Majhau 河の上流は昔のヴェーサーリーに隣接する Muzaffarpur 郡を流れているから、1つの道はマハーニー河に沿って走っていた道であり、もう1つは現在、Bhagalpur のガンジス河を挟んだ対岸には Bihpur という町があり、そこからガンジス河にそって Khagaria、Begusarai を通り、そこから西北に Muzaffarpur に通じる道路（東の方は国道31号線、西の方は国道28号線）があるから、その経路である。ヴェーサーリーはこの Muzaffar-pur の西南25km くらいのところにある。

しかしながら漢訳の『四分律』や『十誦律』ではヴェーサーリーとバディヤの間にも蘇摩ないしは蘇彌、速摩などと表される土地があり、これは国であって、漢訳聖典においては十六大国にも含まれている⁽³⁾。そして『十誦律』ではこの国には婆提城（バディヤ）と蜜城という2つの都市があったとする。とはいいながらパーリ聖典やアッタカターにはこの国のことについては記するところがないから、パーリ聖典の方を優先するわれわれの資料観からすればアンガ国に属していたとするしかないが、しかし【補註11】で考察するように、この地域はパ・漢に共通する資料が形成された以降に「国」として発展したと考えるならば、それなりの広い地域を想定しなければならないであろう。もしそうとするならば、国道31号線と国道28号線の方面にはヴァッジとガンジスの間に挟まれてそれほどの広さを擁することはできないから、マハーニー河の流域にあったとした方がよいかも知れない。

なおこれら「葉捷度」の終着点はクシナーラーないしはパーヴァーであって、アングッターパとは大きく方向が異なり、むしろ真逆である。したがってアングッターパとクシナーラーないしはパーヴァーとの間には空間的なつながりはなく、おそらく主題的なつながりがあったのみであろう。しかし深読みすれば、釈尊の活動範囲はこのアングッターパないしはチャンパーあたりが東辺であったとすることができるかも知れない。

(1) 明本では「蘇摩」とし、後では蘇摩とする。

(2) 「仏在王舎城。爾時跋提城有長者名文荼」とする。

(3) 『仏説人仙經』（大正01 p.213下）、『中阿含』202「持齋經」（大正01 p.772中）、『優婆夷捨舎迦經』（大正01 p.912下）

[3-4] 次にアングッターパの政治的な環境について考えておこう。

DN.004 *Soṇadaṇḍa-s.* (vol. I p.111) には、「その時、婆羅門ソーナダダはチャンパー市に住んでいた。この市は生活に余裕あり、草木水に富み、穀物に富んだ王領地であって、マガダ王セーニヤ・ピンピサーラによって与えられた浄施の拝領地であった」とする。また *Dhammapada* (vs.632~) のソーナ・コーリヴィサの13の詩句集成の最初の偈に、「彼はかつてアンガ王の侍臣として王国の内でも位高き顯官であったが、今ではもろもろの理法の理解にすぐれている。ソーナは苦しみの彼岸に達した」（中村訳）とされるが、アンガ王についてパーリのアッタカターではマガダ国のピンピサーラとする⁽⁴⁾。

そして先に紹介したように *Vinaya* (vol. I p.240 以下) には、「バディヤ市 (Bhaddiyanagara) にメンダカ (Meṇḍaka) という居士がいて、妻にも息子にも穀物や食物や金銀が自然にわき出してくるといふ神通力があつた。マガダ国のピンピサーラ王は自分の領土に (amhākaṃ vijite) そのような神通力を有する者がいるという噂を聞いて、大臣に見て確かめてこいと命じ、大臣は確かめてその通りだと報告した」とされていることを紹介した。

このようにアンガ国も、アンガ国に属していたバディヤ市も、マガダのピンピサーラ王の支配下にあつたようであるから、当然のことながらアングッターパ国もピンピサーラ王の支配下にあつたものと考えられる。

ただし『長阿含』022「種徳經」（大正01 p.094上）には、「一時佛在鶯伽國。與大比丘衆千二百五十人俱遊行人間。止宿瞻婆城伽伽池側。時有婆羅門名曰種徳。住瞻婆城。其城人民衆多熾盛豐樂。波斯匿王即封此城。與種徳婆羅門以爲梵分」とあり、鶯伽（アンガ）国内の瞻婆（チャンパー）城はコーサラ国の波斯匿（パセナディー）王に封された土地とする。しかしその他の数多くの資料からも地理的な面からも、この伝承は信頼できない。

(1) *Paramatthadīpanī* V vol. II pp.267~268

[4] 上記を簡単にまとめておこう。

アングッターパはアンガ国に属する都市であり、ガンジス河の北側にあつて、ヴェーサーリーにつながる交易路上にあつた。そしてアングッターパの近くでガンジス河を渡ると、そこがアンガ国の首都のチャンパーであつた。しかしアンガ国もアングッターパ国も政治的にはピンピサーラ王の支配下にあつた。アングッターパはその市域の中にアーバナという市場町を擁し、アッタカターによればそこには2万の商店 (āpaṇa) が軒を連ねており、そこでアーバナという名がついたというから、アングッターパそのものも豊かな国であつたことが推測される。それは螺髻梵志ケーニヤが釈尊一行を「嫁取り (āvāha) があるのか、嫁入り (vivāha) があるのか、大きな祭祀 (mahāyañña) を行うのか、ピンピサーラ王を軍隊と一緒に招待しているのか」と勘違いされるほどの供養をなしたというエピソードによつても彷彿とされる。おそらくマガダともヴァッジとも密接な経済的関係を有していたのであろう。あるいはそこはガンジス河下流のヒンドゥスタン平野の東部との中継地点になっていたのかも知れない。

※本稿は中島克久が収集したデータを、森が整理して原稿化したものである。

(森 章司)